

## 大江匡衡の文人意識について

呂 天 雯

### はじめに

藤原実資の『小右記』長和元年（一〇一二）七月十七日の条に、「昨夕丹波守匡衡卒。当時名儒無<sup>二</sup>人比肩<sup>一</sup>、文道滅亡」とあり、大江匡衡の死を嘆くとともに、彼の文才を高く評価している。「当時名儒無<sup>二</sup>人比肩<sup>一</sup>、文道滅亡」とは、当時の名儒には匡衡と肩を並べる人がいない、彼の没後、文道もすたれてしまうことを懸念しており、匡衡が「文道」を支える文人として貴重な存在であったことを意味している。実資による評価は匡衡との親しい交友関係を考慮に入れると、この表現をそのまま鵜呑みにもできないが、匡衡が一条朝の文人として活躍していた事実は疑うべくもない。大江匡房の『続本朝往生伝』「一条天皇伝」の中でも「文士」として匡衡の名が挙げられている。

一方で、匡衡が「式部大輔」、「文章博士」などの儒職を歴任し、鎌倉初期に成立したとされる『二中歴』には「儒職歴」と「詩人歴」の双方に名を列ねていることから、彼は文人の身でありながら、儒者

としても高名であったことが窺える。

以上のように、匡衡は「文人（文士）」「儒者」「詩人」といった様々な呼称をもつてとらえられていた。これらの呼称についての検討は、匡衡の人生を考察する上で、避けては通れないものであると考えられる。「文人」「儒者」「詩人」の関係について、工藤重矩氏は平安朝の詩文に表れた「文人」の語の意義について考察を行い、「文人」及びその類縁語は「平安時代の詩人儒者の様態の多面性を示すものである」と指摘した。工藤氏は、「文人」の語義を「能文の人の意」「儒者の意」「詩会の作者の意」と三つに分類している。一つ目の「能文の人の意」の類縁語には「詩人」「詞人」「文士」のほか「属文之人」「知文之人」等々の語があること、二つ目の「儒者の意」の用法は極めて少ないこと、三つ目の「詩会の作者の意」の用例は量的に最も多いことを取り上げながら、「詩人」にしても「通りの語義用法ではない。「儒」系の語（儒者・儒士・儒人など）が具体的には詩人と全く同一人を指すことはごく普通のことである」と指摘している。つまり、「文

人」の語義の幅は広く、「儒者」「詩人」の意を兼ねるものの、実際に「儒者」「詩人」の意と区別して使われることが多い。

匡衡自身の詩文には「文人」の用例は一つしか見られないが、その類縁語は多く用いられている。匡衡は生涯の中で、自分のことをどのように見ていたのであろうか。本稿では、工藤重矩氏の広義の「文人」の意の分類に従って、匡衡の詩文に見えるその類縁語をたどりながら、匡衡の文人意識を考察したい。

## 一 「能文の人」として

「能文」とは文筆に優れるという意であり、工藤重矩氏は用例として、「自「宝字」後、宅嗣及淡海真人三船為「文人之首」」（『続日本紀』天応元年（七八二）六月二十四日条）などを挙げているが、この時代はむしろ「詩人」「文士」などを多く用いており、また、「詩会の作者」の意である「文人」が多く用いられたため、「文人」の「この意義での用法は必ずしも多くない」と指摘している。

匡衡は学問の家柄である大江家に生まれ、自らの人生を回想して詠出した「述懐古調詩一百韻」<sup>(2)</sup>で「十有五入<sup>レ</sup>学、久執<sup>レ</sup>豆与<sup>レ</sup>籩。十六奉<sup>レ</sup>寮試<sup>レ</sup>、音訓無<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>愆」と詠じたように、十五歳で大学寮に入り、十六歳で大学寮の寮試を受けて、擬文章生になった。これこそ彼が「文道」に入った起点であろう。当時の大学寮は紀伝道（歴史、漢文学）、明経道（儒学）、明法道（法律）、算道（算術）という四つの構成であった。大江氏は紀伝道の直曹文章院の東曹を分掌していた

ことから、匡衡は紀伝道で漢文学の教養を身につけた「文人」であることがわかる。そもそも、紀伝道は「文章は経国の大業、不朽の盛事なり」（曹丕『典論』『論文』）という理念のもとで発展を遂げていたため、紀伝道出身者が「文」を以って朝廷に仕える道は最初から方向づけられていたと考えられる。匡衡は美濃守の申文の中で、「匡衡文章奉公之功、於<sup>二</sup>当時<sup>一</sup>異<sup>二</sup>他人<sup>一</sup>矣。御元服賀表、染<sup>二</sup>松筆<sup>一</sup>而析<sup>二</sup>千年<sup>一</sup>。大宋国報書、載<sup>二</sup>竹牒<sup>一</sup>而伝<sup>二</sup>万里<sup>一</sup>」と述べているように、彼是一条天皇の元服時の賀表と中国からの書状の返答「牒<sup>下</sup>大宋国杭州奉先寺伝<sup>二</sup>天台智者教<sup>一</sup>講経論和尚<sup>上</sup>」など特別な意義のある文章を書いたため、「文章」をもって「奉公する」功労も格別なものであると自負して、官職を求めている。

彼はまた「長江瞻望多」という詩で、「心与<sup>二</sup>過流<sup>一</sup>帰鳥<sup>一</sup>去、眼随<sup>二</sup>遠岸<sup>一</sup>遠帆<sup>一</sup>遮。忽抛<sup>二</sup>東海<sup>一</sup>浴<sup>二</sup>恩沢<sup>一</sup>、文士輝榮在<sup>二</sup>我家<sup>一</sup>」と詠じた。詩の制作年時は不明であるが、「東海」の語が東海道の意であることから、匡衡が尾張守の在任中と推定できる。「文士」としての光榮は我が大江家にあるため、尾張の国守を辞し、都に帰って帝に近侍したなどの意を表した。ここでの「輝榮」は前述した「文章奉公之功」による榮譽のように、遠祖大江音人をはじめとする大江氏が文章を以て朝廷に仕えて得た榮譽であると考えられる。「文士」の語は「君子避<sup>二</sup>三端<sup>一</sup>、避<sup>二</sup>文士<sup>一</sup>之筆端<sup>一</sup>、避<sup>二</sup>武士<sup>一</sup>之鋒端<sup>一</sup>、避<sup>二</sup>辯士<sup>一</sup>之舌端<sup>一</sup>」（『韓詩外伝』）、「世所謂文士多<sup>二</sup>数奇<sup>一</sup>、詩人尤命薄」（『白氏長慶集』「序洛詩」）などの用例もあり、この一句からも、匡衡が大江家の人々

を文人として見なしていることがわかる。

匡衡は「能文の人」として朝廷に仕えていただけではなく、貴頭の依頼を受けて文書の代作もしている。藤原行成の『権記』には長保元年（九九九）九月七日の条に、「今日献<sub>レ</sub>辞<sub>二</sub>藏人頭<sub>一</sub>状<sub>上</sub>、令<sub>二</sub>匡衡朝臣作<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>」、寛弘四年（一〇〇七）十二月二日の条に、「書<sub>二</sub>願文<sub>一</sub>、匡衡之作<sub>レ</sub>」という記述が見え、匡衡は行成のために代作していることがわかる。また、『本朝文粹』には、匡衡が藤原兼家のために起草した太政大臣・封戸・准三宮を辞する上表文、藤原道隆が積善寺を御願寺にするように請願する奏状、多くの人のための願文など、計二十三篇収録されている。これもやはり匡衡が「能文の人」であることが認められた証と言えよう。

## 二 「儒者」として

前述した工藤氏の論考<sup>(3)</sup>によると、「儒者」の意としての「文人」の用法は極めて少なく、一般的には「儒」系の語（儒者・儒士・儒人など）が用いられているということがわかる。匡衡の詩文にも、「儒者」の意としての「文人」の用法は見られず、その分「儒」系の言葉が多く用いられている。

「儒者」とは言うまでもなく、儒学の徒を指す。これはむしろ「詩人」の対義語としてのイメージが強い。その典型的なものとしては、醍醐朝の詩人島田忠臣が「儒家問謫詩無用、王法新行酒莫<sub>レ</sub>淫<sub>上</sub>」（「春日仮景、訪<sub>二</sub>同門友人<sub>一</sub>」）と詠じた一句があり、「儒家」が「詩人」を軽

視して批判する当時の実相を窺いしることができらるう。「儒家」

と「詩人」の位相について、増田繁夫氏は、「儒学は本来治世のための現実的な学問であり、基本は実学であるから、詩歌のような芸術的な分野をもその包含する広い視野をもつてはいても、……儒学の立場からすれば、詩は政教的な意味においてのみ認められるということなのである<sup>(4)</sup>」と論じた。後藤昭雄氏は大江音人と菅原是善の官歴などを比較して、音人を「本才的学問を基礎とする実務型文人官僚」「在朝の通儒」と評するのに対して、是善を「常に風月を賞で、吟詩を楽しむ」「詩人」と評して、「儒家と詩人という、文人における二つの生き方が音人と菅原是善の生涯の上に具現化されている」と論じた<sup>(5)</sup>。滝川幸司氏は「詩人無用論」について論を深め、「詩人の存在自体が無用だと非難しているのではなく、政事・実務に詩人など無用である」と考察した上で、「紀伝道出身者は儒家であることが前提であり……儒家の内側に詩人が存している」と述べ、「儒家と詩人とは対立すべき存在なのか」という疑問を提示したのである<sup>(6)</sup>。以上の論考からみれば、「儒者」は経世的な側面が強く、風流な詩文を作る「詩人」とは異なったイメージがあるが、「文人」としては根本的に対立しているわけではなく、深いつながりを持つ存在であることがわかる。

匡衡の場合はどうであろう。彼には、寛弘七年（一〇一〇）、丹波守の在任中に祈雨のために作った詩文がある。

荷<sub>レ</sub>鍤<sub>上</sub>染毫歌德政

鍤<sub>上</sub>を荷<sub>レ</sub>ひ毫<sub>上</sub>を染め徳政を歌ふ

為<sub>レ</sub>儒<sub>上</sub>為<sub>レ</sub>吏<sub>上</sub>遇明時

儒と為<sub>レ</sub>り吏と為<sub>レ</sub>り明時に遇ふ

予期吾土如雲稼 予め期す吾が土 雲の如き稼なるを

高詠楽天賀雨詩 高く詠ぜん楽天賀雨の詩

「荷鍤」は鋤をかつぐこと。この一首の詩題に「僕以<sub>レ</sub>紙為<sub>二</sub>良田<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>筆為<sub>二</sub>耒耜<sub>一</sub>。不<sub>下</sub>独弄<sub>二</sub>風月<sub>一</sub>、誇<sub>中</sub>翰林主人之名<sub>上</sub>、亦欲<sub>下</sub>慕<sub>二</sub>循良<sub>一</sub>、顯<sub>中</sub>丹州刺史之志<sub>上</sub>。以<sub>二</sub>絶句二首<sub>一</sub>題<sub>二</sub>東閣之壁<sub>一</sub>」との語句も見られる。匡衡は紙を良田に、筆を鋤に譬えて、文筆の業を文字通り筆耕と見なしていることから、詩の一句目では「鍤を荷ひ、毫を染め」と言ったものと考えられる。「以<sub>レ</sub>紙為<sub>二</sub>良田<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>筆為<sub>二</sub>耒耜<sub>一</sub>」については、『世説新語』「賞譽」に「凡此諸君、以<sub>二</sub>洪筆<sub>一</sub>為<sub>二</sub>鉏耒<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>紙札<sub>一</sub>為<sub>二</sub>良田<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>玄默<sub>一</sub>為<sub>二</sub>稼穡<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>義理<sub>一</sub>為<sub>二</sub>豊年<sub>一</sub>」とあり、文業を農事に譬えていう先行用例として考えられる。また、匡衡が「申<sub>二</sub>越前尾張等国守闕<sub>一</sub>状」の中で、「不<sub>レ</sub>種<sub>二</sub>一頃之田<sub>一</sub>、積<sub>二</sub>学稼<sub>一</sub>為<sub>二</sub>口中食<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>採<sub>二</sub>一枝之桑<sub>一</sub>、織<sub>二</sub>文章<sub>一</sub>為<sub>二</sub>身上之衣<sub>一</sub>」(『本朝文粹』卷六)と述べたのも農業にこそ従事していないが、農事にたとえて学問や文章によって立身する儒者としての在り方を浮き彫りにしている。

前述した詩題に述べた紙を良田として、筆を鋤とする文筆の業はここでは具体的に天皇の「徳政」及びめぐみの御代にめぐり会ったことを賞賛することを指す。儒者は、文章を通じて帝徳を賛美することによって、帝の恩沢に浴することが期待できる。匡衡は「請<sub>下</sub>殊蒙<sub>二</sub>天恩<sub>一</sub>、依<sub>二</sub>檢非違使<sub>一</sub>兼<sub>中</sub>任越前尾張等国守闕<sub>上</sub>状」の中でも、「幸期<sub>二</sub>一遇之榮<sub>一</sub>、王沢温潤、此時不<sub>レ</sub>浴何時浴、儒林光華、此時不<sub>レ</sub>開

何時開」と訴え、儒者として榮譽を期し、温潤溢れる「王沢」に浴したいとする期待を表している。匡衡の時代には、「文章経国」の理念は唱えられなくなったが、この詩では「吾が土」に作物が雲のようにみちみちることを願っているということからは、経世的な思想が読み取れる。

二句目にある「為儒為吏」については、「儒」とは詩題にいう「翰林主人」こと文章博士を指し、「吏」とは詩題にある法を遵守する良き官吏を慕う「丹州刺史」こと丹波守を指す。匡衡は詩文で常に昇進したい気持ちを詠出していた。彼は四十七歳に詠じた「暮春応製」詩のなかでも、「吏部侍郎思<sub>二</sub>八坐<sub>一</sub>」【式部大輔為侍読者、必早昇八座】、尾州刺史夢<sub>二</sub>三刀<sub>一</sub>【儒官兼刺史、殊常之恩也】と、吏部侍郎としては参議の座を願っていることを表明した。また、梁の上に四つの刀が懸っていることを夢見て益州刺史となった王濬(『蒙求』「王濬懸刀」)の故事を引いて、尾張守としての匡衡自身が次の国守任命を夢見たことを述べている。割注に「儒官兼<sub>二</sub>刺史<sub>一</sub>、殊常之恩也」とあり、儒者として文章博士に任ぜられて、国司を兼任することは天皇の特別な恩恵に与かったことを示した。匡衡はこの詩でも儒者として賢明な君主に出会ったことによって、天皇の「徳政」を謳っている。

一方で、「冬日於<sub>二</sub>州廟<sub>一</sub>賦<sub>レ</sub>詩」の序文で、「今東曹末儒江侍郎、思<sub>二</sub>郷貢<sub>一</sub>以興<sub>二</sub>学校院<sub>一</sub>」と述べたように、匡衡は自身を大江家が管理する大学寮の東曹の「末儒」であると表現している。「末儒」は末席を汚す儒者の意であり、同じ表現は匡衡の「奉<sub>二</sub>行成<sub>一</sub>書」にも見

られる。さらに、その詩文には次のように記されている。

明時侍読一愚儒 明時の侍読 一の愚儒なり

再得尾州竹使符 再び尾州の竹使符を得たり

長保春風初促駕 長保の春風初めて駕を促し

寛弘冬雪更迷途 寛弘の冬雪更に途に迷ふ

割鶏唯愧藁雲劍 鶏を割くに唯だ愧づ藁雲の劍

折蚌只慙合浦珠 蚌を折きて只だ慙づ合浦の珠

洛下親朋莫抛我 洛下の親朋 我を抛つること莫かれ

欲填月税与花租 月税と花租とを填めんと欲す

この詩は首聯下句から推察されるように、匡衡が再び尾張守に任命された寛弘六年（一〇〇九）に作られたものである。寛弘六年には彼は侍読、文章博士、尾張守の三官を兼任しているが、自分を一人の愚かな儒者として卑下している。「愚儒」の語は「愚儒所」管見、邂逅弁「榆躰」〔述懐古調詩一百韻〕にも見られ、匡衡の謙称である。「榆躰」は天体の運行をいう。この一句では、匡衡は自分が狭い見識でありながら、星の運行の巡り合わせを解いたことを謙遜して語っている。頸聯上句の「割鶏」は「子之」武城、聞「弦歌之声」。夫子莞爾而笑、曰割「鶏焉用」牛刀」という故事〔論語「陽貨」〕を踏まえたものである。これは小事を処理するのに大がかりな手段を用いる必要がないことを意味している。「牛刀」は才能がある人のたとえであるが、ここでは尾張国の熱田宮に祭られた日本武尊の草薙劍すなわち天叢雲劍（藁雲劍）に代えられている。頸聯下句の「合浦珠」は

『後漢書』『循吏列伝』に記された合浦太守孟嘗の故事による。合浦は真珠の産地であり、前任の太守の貪欲によって真珠が取れなくなったが、孟嘗が合浦太守に就任した後、清廉な政治を行ったため、貝が再び姿を現しまた真珠が産出されるようになったとの相承である。この二句は「愧」「慙」の語を用いて、自分が国守として能力の乏しいことを謙遜して言っているもので、一句目にある「愚儒」と呼応している。尾聯では、匡衡は都にいる友人に自分を見捨てないように頼み、詩興をそそる風物「月と花」の租税として、「詩文」を差し上げようとする詩人としての姿勢が窺える。この一首では、匡衡は国守として能力が足りないことを恥じて、「愚儒」と謙遜しているが、本心は都で催される公の詩宴に参列したいのではないかと思われる。

また、匡衡の「秋夜守」庚申「同賦」蘭以「香為」貴の頸聯・尾聯には次のような内容が見られる。

江楓葉落沈淪久 江楓の葉落ちて沈淪すること久しく

籬菊花遲採擢空 籬菊の花遅れて採擢すること空し

幸遇薰猶分別日 幸に薰猶分別の日に遇ふも

腐儒独愧志難通 腐儒独り愧づ志の通じ難きことを

「江楓」の葉が落ちて、「籬菊」の開花が遅れていることを嘆いているが、「江」には「江家」の意が含まれ、頸聯の二句では匡衡は久しく沈淪していて、拔擢されない不遇を訴えているとも考えられる。尾聯上句の「薰猶」は芳香のある草と悪臭のある草であり、尾聯下句の「腐儒」はくされ儒者、役に立たない儒者の意である。「腐儒」の語は



道真の「家児不<sub>レ</sub>放<sub>二</sub>山林去<sub>一</sub>、苦熱庸材一腐儒」(「夏日四絶」「苦熱」)、「宣風坊下腐儒家、欲<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>春來快見<sub>レ</sub>花<sub>一</sub>」(「勸<sub>二</sub>前進士山風<sub>一</sub>種<sub>二</sub>庭樹<sub>一</sub>」)にも見られ、道真が自分のことを指して使用した用例である。「荀子」の「非相」には「故君子之於<sub>レ</sub>言無<sub>レ</sub>厭、鄙夫反<sub>レ</sub>是、好<sub>二</sub>其美<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>恤<sub>二</sub>其文<sub>一</sub>、是以終身不<sub>レ</sub>免<sub>二</sub>埤汚庸俗<sub>一</sub>。故『易』曰、括囊、無<sub>レ</sub>咎無<sub>レ</sub>譽。腐儒之謂也」とあり、腐儒の特徴としては『易』の「坤」に記されたように、囊の口を括るように口を慎み、咎めもなく誉れもない人物のことである、と説かれている。匡衡は尾聯の二句で、自分が幸運にも是非曲直の分別がある明君の御代にめぐりあわせているが、名実のない「腐儒」に過ぎず、志の実現できないことを恥じていると詠じた。前後から見れば、匡衡の「志」とは儒者として栄達することには他ならない。

「愚儒」「腐儒」という表現は「明時」「薰猶分別日」に對置して、匡衡が自分のことを卑下しながら、明主を称える意図が読み取れる。天子の徳を称賛することは正に律令社会の儒者の役目の一つであると言えよう。「愚儒」「腐儒」の語のほか、「返<sub>二</sub>送貞觀政要於藏人頭藤原行成朝臣<sub>一</sub>状」の署名には「窮儒大江匡衡」とあるように、「窮儒」の語も見られる。「窮儒」とは困窮した立場にある儒者であり、「愚儒」「腐儒」の語とともに、匡衡の謙遜の気持ちを表出したが、彼の不遇感も漂っている。

### 三 詩会の作者として

匡衡の詩文には「文人」の用例は一例しか見えない。「述懷古調詩一百韻」に、「請<sub>二</sub>補<sub>二</sub>文人職<sub>一</sub>、両儒多<sub>二</sub>頗偏<sub>一</sub>」とあり、匡衡が積奠文人の任を申し出たが、評定の博士は不公平にも推挙してくれなかつたと詠じた。ここでの「文人」とは積奠文人のことであり、春秋の積奠の際、詩を賦して献上する大学寮の擬文章生のことである。ここでの「文人」は工藤重矩氏の「文人」の三番目の分類にかかわるもので、「賦詩を伴う行事における一種の儀式用語」「選定され献詩者の資格を持つ者」と理解できる。

匡衡は詩会の作者として多くの詩宴に姿を現していた。そのような匡衡の姿を「風月」の語との関連から見てみたい。『江吏部集』巻上に収録されている「八月十五夜江州野亭対<sub>レ</sub>月言<sub>レ</sub>志」は寛弘二年(一〇〇五) 匡衡が近江国で療養した時、八月十五夜に宮中の詩宴を思いやって詠じたものである。

不<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>漢宮之月<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>梁園之月<sub>一</sub>。

不<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>鳳琴之声<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>龍笛之声<sub>一</sub>。

我雖<sub>レ</sub>返<sub>二</sub>風月之名<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>風月之席<sub>一</sub>因縁猶淺明矣。

と、匡衡はここで「風月」の名を身に帯びていると自負しながら、「風月」の席と縁が浅いことを述べている。「漢宮」は漢の宮殿、「梁園」は漢代、梁の孝王が営んだ庭園であるが、ここでは、いずれも匡衡から遠く離れている宮中のことを指す。「鳳琴」とは「鳳凰琴」のこと、

あるいは広く宝琴をさす。「龍笛」とは笛の一種、その音は竜が水中で鳴くような音なので、「龍笛」と呼ばれている。「鳳琴」「龍笛」はここで宮中の音楽を指す。時は八月十五夜であり、宮中では詩宴が行われているが、都から遠く離れている匡衡には宮中からの月が見えず、音楽が聞こえていない。この二句には宮中から遠ざかっている不遇の思いがみなぎる。「於『風月之席』因縁猶淺」との一句からは、言うまでもなく「風月之席」すなわち宮中の詩宴に参列がかなわなかった気持ちが読みとれる。

「風月」の語については、大曾根章介氏と後藤昭雄氏<sup>(8)</sup>の論述に詳しい。両氏によると、「風月」の意は単なる「風」や「月」という自然現象から詩興をそそる清風朗月、さらに風月に恵まれる自然を賞翫する風流な心からその風流心によって吟詠執筆する詩賦文章へと移り変わっている。また、滝川幸司氏は菅原道真をはじめとする律令官人が詩文に詠じた「風月」を取り上げて、「『風月』は国家の行う公宴・儀式における詩会での献詩を指そう<sup>(9)</sup>」と指摘している。ここで匡衡が言った「風月」も詩賦文章に関係するものであることはいうまでもない。「風月の名」とは詩文による文人としての名声を指し、「風月の席」とは詩文を作る席を意味している。この詩の中では文人たちにとって名誉である宮中の詩宴を指す。匡衡は文人を自負しているため、本来自分がいるはずの宮中の詩宴に出られない無念さのあまりに、「定知、翰林主人独『歩於文場』、醉郷先生鷹『揚於酒城』」<sup>(10)</sup>と言いい、「翰林主人」「醉郷先生」が活躍する宮中の詩宴の様子を想像していた。宮中の詩

宴に身を置きたいという願いと裏腹の現実において、宮中の「風月の席」に思いを馳せていたと思われる。

一方で、匡衡は宮中の詩宴に出ることはかなわなかったが、わび住まいの中にもかかわらず、「向『明月』而閑詠、自為『白雪之歌』」と、専ら詩文を吟詠していた。それこそ「風月の名」を持つ文人が詩心を貫く姿勢であろう。

「風月」の語は詩文と関わる意で、匡衡のほかの作品にも見られる。

①身老『五花風月席』、家経『十葉帝王師』。

（『九月尽日惜秋言』<sup>(11)</sup>志）

②是以率『一両門生』、於『学校院辺』、聊命『筆硯』。於戯侍読未<sup>レ</sup>必<sup>レ</sup>遠吏、我再任『蘆葦卑湿之地』。分憂未<sup>レ</sup>必<sup>レ</sup>翰林、我初展『風月宴遊之筵』。

（『冬日於州廟賦詩』<sup>(12)</sup>）

③香花紹介在『風月』、此契他生不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>忘。

（『法音寺言』<sup>(13)</sup>志）

④四五十年事『風月』、今春才尽不<sup>レ</sup>奔宮。

（『四月一日見三月尽日春被『鶯花送』之題』。不堪<sup>(14)</sup>感歎<sup>(15)</sup>作詩加<sup>(16)</sup>之）

⑤以『儒学』為<sup>レ</sup>業、以『風月』為<sup>レ</sup>資。貧而樂<sup>レ</sup>道、未<sup>レ</sup>兼<sup>(17)</sup>温官。

（『請特蒙『鴻慈』因『淮先例』兼任弁官左右衛門権佐大学頭等一申<sup>(18)</sup>『佗官』替<sup>(19)</sup>上<sup>(20)</sup>状』）

⑥匡衡業『書籍』而貧、携『風月』而老。

〔請<sub>下</sub>特蒙<sub>上</sub>天恩<sub>上</sub>因<sub>上</sub>准先例<sub>上</sub>兼<sub>中</sub>任備中介闕<sub>上</sub>状〕

①は詩題にもあるように「言志」詩に当り、匡衡が自身の身の上を振り返って思いを述べたものである。「五花」については、木戸裕子氏は「待客之上地」<sup>(10)</sup>とされる唐代の旅館五花館を推測しているが、未だ解明されていない。「五花風月席」は、先述した「風月の席」と同じく、文人にとって名誉な宮中の詩宴のことである。「十葉帝王師」とは、江家の始祖大江音人が清和天皇の侍読を務めて以来、匡衡自身が侍読した一条天皇まで、大江家は十一代にわたって天皇の師として仕えてきた経歴を指している。この二句は、匡衡が宮中の晴れがましい詩宴に出ていたこと、大江家の家業を受けついで天皇の侍読を務めたことを詠じ、文人としても儒者としても朝廷で活躍していた姿を想起させる。②は寛弘六年(一〇〇九)匡衡が尾張守として在任中に門生を集めて、都から遠く離れた僻地で詩宴を楽しんだことを述べている。「聊か筆硯を命ず」とあることから、「風月宴遊の筵」とは詩文を作る宴であつたことがわかる。匡衡は地方の官吏を務めながらも、詩宴を開いたのは、文人としての強い意識が働いているからだろう。③では匡衡は香花への導きが「風月」にあり、この縁を他生になつても忘れてはならないと述べている。ここでは、「香花」は仏教のことであり、「風月」は詩文のことである。仏教と詩文の関わりについては、匡衡は「七言冬日登天台」即事。応員外藤納言教言」に「納言尊閣、命一儒生、吾有法門師友、已以道通交情、汝為翰林主人、宜以詩作仏事」と記したことが想起される。権大

納言であつた藤原道長が「一儒生」たる匡衡に「宜しく詩を以て仏事を作すべし」と命じたのである。この記述から当時、詩文を作ることにも仏事であると認められたことがわかる。また、匡衡は文章の最後で「言」詩讀<sub>レ</sub>仏風流冷、感<sub>レ</sub>法礼<sub>レ</sub>僧露味甘。恩煦豈<sub>レ</sub>図<sub>レ</sub>兼<sub>二</sub>二世<sub>一</sub>、安知珠繫醉猶酣」と詠じた。詩を詠じ、仏を讃えることは白居易が唱えた「願以今生世俗文字之業、狂言綺語之過」、転為<sub>二</sub>将来世世讀<sub>レ</sub>仏乘之因、転法輪之縁<sub>一</sub>」(『白氏文集』卷七十一「香山寺白氏洛中集記」)によるものと考えられる。詩文を作つて仏事をなしていることは、文人の仏教信仰の様相を呈しているものではないだろうか。④は制作年次がわからないが、「四五十年も風月を事として」きたことから、晩年に作られたものと推察される。今年の春には才能が尽きていて、忙しく励んでいないことから、ここである「風月」は才能と関わるもので、言うまでもなく匡衡が文人として扱っている詩文のことであることがわかる。しかもそれは才能が競われる公の場での詩文制作ではないかと思う。

⑤、⑥は匡衡が任官を求める申文によるものである。⑤の「以風月為資」という表現は、菅原文時の詩句「家資風月雖老未忘」(『本朝文粹』卷十二「老閑行」)、「風月唯為家資」(『本朝文粹』卷二「答諸公卿請減封祿表勅」)などに先例が見られ、「風月」を「家資」とすることは詩宴で詩文を賦することによって俸禄を得ることを意味している。「以儒學為業」との一句は、匡衡が儒學を本業とする儒者としての立場を示している。⑥は匡衡が儒學を業として、



貧しい生活を送りながら、詩文に携わって、老いていくとの不遇の気持ちを表して、儒者文人としての在り方を明らかにした。

①では「風月席」は「帝王師」と、⑤、⑥では、「風月」はそれぞれ「儒学」「書籍」と対句的に用いられ、「文人」でありながら、「儒者」である身分が匡衡の中で一体化していることがわかる。彼が「述懐古調詩一百韻」で「象岳聚群書」、文儒豈棄捐」と述べ、藤原道長を筆頭に五岳に比する高貴な大臣たちは書物を集めて学問を重んじているので、「文儒」は見捨てられることはないだろうとの意である。匡衡は平安時代の作品に稀に見える「文儒」という語を使った。

「文儒」は王充の『論衡』『書解』には「著作者為文儒」、説経者為世儒」とあり、著作を業とする儒者の一種を意味する。また、李白の「趙俗愛長劍」、文儒少逢迎」(「自広平乗醉走馬六十里至邯鄲登城覽古書懷」、白居易の「幸逢太平世」、天子好文儒」(「常楽里閑居偶題十六韻兼寄劉十五公」)にもあるように、「文儒」は文人、文士を意味するものとした用例が散見される。匡衡が言った「文儒」とは詩文や学問に携わる「文人」「儒者」の意であり、もちろん匡衡自身のことを言っている。匡衡の「文人」「儒者」の意識はどのように詩文の中に投影しているのか、具体的に見ていきたい。

「秋夜閑談」(『江吏部集』卷上)には、  
翰林学士非<sup>そうれき</sup>忿劇 翰林学士 忿劇に非ず  
吏部員外猶後群 吏部員外猶は群に後れたり

大江匡衡の文人意識について(呂)

言志閑談東閣月

志を言ひて閑談す東閣の月

徇名遙愧北山雲

名に徇ひて遙かに愧づ北山の雲

偶逢鮑叔能知我

偶たま鮑叔の能く我を知るに逢ひて

將就龍媒試事君

將に龍媒に就きて試みに君に事へんとす

目想心看何所待

目に想ひ心に看る何の待る所ぞ

不如万一志斯文

如かず万一斯の文に志さんには

と詠まれている。この一首は「翰林学士」「吏部員外」という官職名から、匡衡が文章博士と式部権大輔を兼任した寛弘六年(一〇〇九)に作られたと推定できる。詩の中では、彼は文章博士を務めているが、さほど激務ではなく、また、式部権大輔に任じられているが、同輩たちには後れを取っていると詠じ、儒者としての沈淪を訴えている。頸聯上句に「鮑叔」とあるのは、鮑叔牙と管仲の故事による。管仲は鮑叔牙の推挙によって斉の桓公に重用され、鮑叔牙が自分のことをよく理解し、支えつづけてくれたため、「知我者鮑子也」と言って、深い感動を表明している。ここでは、匡衡は時の権力者藤原道長を鮑叔牙になぞらえて、自分が道長の知遇を得たことを詠出した。道長と匡衡の関係を示す詩作はほかにもある。前述した「七言冬日登天台」即事。応「員外藤納言教言」の序文で、当時権大納言であった藤原道長に詩を命じられた匡衡は、「避席垂涙曰、多年不遇知己、徒老尼山之雪。今日被引善縁、幸攀台岳之雲、不敢辭死、況於詩乎」と述べた。長年認めてくれる人に遇えなくて、儒学を学んでも、徒に老いていくばかりであった自分は、幸運にも仏縁にひかれ

て、道長のお伴をして比叡山に詣でた上は、死ぬことも甘んじて受け入れられる。ましてや詩を作ることはどうして拒もうかと、感動の心境を表した。また、寛弘六年（一〇〇九）侍読を務めていた匡衡は一月に尾張守に、三月に再び文章博士に拝された時も、その祝賀として、道長から、「侍読皇恩歳歳新、尾州再作撫民人」。恒榮昔者猶応劣、李部翰林任人類」という「金玉韻」を受けて、「情感を抑え難い」と感情の高ぶりを表していた。頸聯下句にある「龍媒」とは天馬のとき駿馬のことであり、優れた人材のたとえである。ここでは、匡衡は道長を「龍媒」と譬えて、優れた才能のある道長に付きしたがって仕えようとする意思を表した。

尾聯では、匡衡は仕える方法を探り、「いろいろな方法がある中、斯文に志すことに及ばない」と詠んでいる。「斯文」とは『論語』『子罕』の「子畏於匡」。曰、文王既没、文不<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>茲乎。天之将<sub>レ</sub>喪<sub>レ</sub>斯文也、後死者不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>於斯文也」による言葉であり、「この学問」「この道」を指し、周の文王が作った礼楽文化を意味する。ここでは、儒学の道を指す。この一句からも、匡衡が儒者としての道を貫こうとする意欲が看取される。

一方で、「匡衡榮謝伯春、未<sub>レ</sub>作詩家之宗匠」。歩亜<sub>二</sub>余子<sub>一</sub>、徒瘦<sub>二</sub>学路之嶮難<sub>一</sub>」（「七言五月五日陪内相府池亭同賦雲峯入夏池」応<sub>レ</sub>教詩一首）から窺えるように、「詩家の宗匠」になることを希望していたのである。「伯春」は後漢の碩儒召馴のことであり、彼は博学で章帝の侍講を務めて、章帝の厚遇を受けたという。「余子」

は『莊子』『秋水』に出ている、邯鄲の都風の歩き方を学ぼうとして、本来の自分の歩き方まで忘れてしまった寿陵の若者のことである。この二句には、匡衡はあの後漢の碩儒召馴のように、学問によって榮譽を得たが、まだ「詩家の宗匠」にはなれない、学問の道を歩んでもその険しさに苦しんで進めないことの悔しさがにじみ出ている。匡衡は自ら「文人」「儒者」と意識し、未だ遂げられぬ人生の目標を掲げていたと考えられる。

### おわりに

匡衡の「文人」としての性質を「能文の人」「儒者」「詩会の作者」三つの面から見てきた。彼は、文筆に優れ、儒者として、詩会の参加者として一条朝の「文人」として活躍していた。

匡衡は「述懐古調詩一百韻」の中で、祖父維時が自分を励ましてくれた言葉を「我以<sub>二</sub>稽古力<sub>一</sub>、早備<sub>二</sub>公卿員<sub>一</sub>。汝有<sub>二</sub>帝師体<sub>一</sub>、必遇<sub>二</sub>文王田<sub>一</sub>」と回顧している。維時は「自分は学問の力で早く公卿に列した。あなたには帝王の師となる相があるから、きっと呂尚が周の文王に見出されたように、帝のお引き立てに遇うことだろう」と、匡衡に公卿になって、帝に奉仕するという儒者としての人生のあり方を指し示した。匡衡はその教えに真剣に答えようとして、「浮<sub>二</sub>沈泗水底<sub>一</sub>、昇<sub>二</sub>降尼山巔<sub>一</sub>。夜宴<sub>二</sub>文峰壘<sub>一</sub>、朝宗<sub>二</sub>学海吞<sub>一</sub>」とあるように勉学に没頭した。「泗水」は孔子がほとりで道を説いた川であり、「尼山」は孔子の生まれた山であり、この一句は孔子ゆかりの場所を儒学に譬

え、匡衡が学問に耽り、儒学を究めようとしている姿勢と意気込みを示している。「文峰」は詩文を峰に、「学海」は学問を海に譬え、この一句は毎日詩文や学問を嗜む様子をうかがわせる。つまり、匡衡は自らを儒者文人すなわち「文儒」として自覚していたことがわかる。

紀伝道出身者の匡衡は、「風月の名」という文人としての自負を持つて、「風月の席」で詩文の道を貫こうとする意欲を明らかにした。一方で、彼はまた文章によって朝廷に仕える儒者であり、公卿になる理想をかかげ、昇進を待ち望んでいた。匡衡は「儒者」「文人」の役目を「文儒」という語句で表現しながら、人生を歩んでいたと言えるよう。

注1 工藤重矩「平安朝における「文人」について」(『文学論叢』今井源衛教授退官記念)、九州大学文学部国語学国文学研究室、一九八二年六月。

(2) 大江匡衡の漢詩は『新校群書類従』巻第百三十二に収められる『江吏部集』を底本にして、表記を常用漢字体に改めたものである。訓読、解釈などは木戸裕子氏「江吏部集試注一」(『文献探究の会』二〇〇九年四月)、「江吏部集試注四」(『文献探究』、文献探究の会、二〇〇九年四月)、「江吏部集試注七」(『鹿兒島県立短期大学紀要』五一号、二〇〇〇年十月)、「江吏部集試注十一」(『文献探究』三十九号、文献探究の会、二〇〇一年三月)、「江吏部集試注十五」(『文献探究』四十五、文献探究の会、二〇〇一年三月)、「江吏部集試注十五」(『文献探究』四十五、文献探究の会、二〇〇七年三月)、「江吏部集試注十六」(『鹿兒島県立短期大学文学会論集』『人文』三十一号、二〇〇七年八月)、後藤昭雄『大江匡衡』(吉川弘文館、二〇〇六年三月)などを参照した。

(3) 注(1)に同じ。

(4) 増田繁夫「道真以降―文人の誕生」(『国文学』三十七、一九九二年)。

(5) 後藤昭雄「大江音人について―「在朝の通儒」―」(『国語国文薩摩路』国文学開講三十周年記念号、鹿兒島大学文理学部国文学会、一九八〇年八月)。

(6) 滝川幸司「菅原道真の位置―儒家から見た詩人無用論―」(『国語と国文学』、東京大学国語国文学会、二〇一一年十一月)。

(7) 底本とする『新校群書類従』では「挿」としているが、文脈によって、松平文庫本などに従って、「鏤」とする。

(8) 大曾根章介「風月」攷―菅原道真を中心にして―(『日本漢文学論集』、汲古書院、二〇〇〇年七月)、後藤昭雄「漢詩・漢文を作る」(『岩波講座日本文学史 第一巻』、岩波書店、一九九五年)を参照。

(9) 滝川幸司「風月」考―公宴詩会との関わりにおいて―(『語文』第六十六号、大阪大学国語国文学会、一九九六年七月)を参照。

(10) 木戸裕子「江吏部集試注七」(『鹿兒島県立短期大学紀要』五一号、二〇〇〇年十月)を参照。